【創意工夫の経営改善だけでは打開できない地方鉄道の窮状】

経営努力の限界

これまで途方もないシミュレーションを繰り返し、ギリギリの経費削減にトライしてきた「へいちく」。アイデア企画の展開やPRなどの経営努力だけでは超えられない限界が見えてきました。

厳しい現状を打開するために、さまざまな取り組みを試みる「へいちく」。観光列車「潮風号」の導入や広告物を掲載した「ラッピング列車」、「へいちく浪漫号」などの新車両を導入し、利用客数の増加とイメージアップを図っています。

黒から白へシフトした後

開業以来10年間黒字を維持し「三セクの優等生」と呼ばれた「へいちく」。その強みは石灰・セメントによる貨物輸送にありました。伊田線の直方～金田間で、平成2年の貨物輸送収入は2億円以上。かつて石炭が〝黒ダイヤ〟と呼ばれたのに対し、それに替わる産出を担った石灰・セメントは〝白ダイヤ〟と呼ばれました。しかし、その時代も長くは続かず、平成4年に石炭輸送が無くなり、平成16年には三井鉱山セメント（田川市）の解散でセメント輸送も廃止され、営業収入の約16％を占めた貨物輸送を失ってしまいます。その苦境に加え乗客数も大幅に減少。本年度の乗客数は、ピーク時の約半分にまで落ち込む見込みです。

『平成筑豊鉄道の潜在需要と地域活性化に関する研究』をまとめた福岡県立大学の文屋俊子教授は「経営の合理化やサービスの向上、地元との連携という経営維持の努力はなされていますが、効果を上げたとは言い難い状況です。開業後数年間の乗客増は、駅の増設や増便の効果だと思われます。その影響が一段落した後は、自治体による駅舎改築や地元との連携策なども進んではいますが、めざましい乗客増にはつながっていません」と分析。地域を支える公共交通である「へいちく」の行く末を危惧しています。

●interview

福岡県立大学
人間社会学部
文屋 俊子 教授

福智町にはへいちくの本社があるということをもっと評価し、誇るべきです。平成19年に行った調査では、鉄道を普段利用しない人でも3分の2以上は公共交通機関が必要だと回答しています。ぜひ町のシンボルの一つとして捉え、観光や地域活性化のまちづくりに地域の鉄道を活用して欲しいと思います。

かつて黒い壁が動いているようにもみえた貨物車両の列は、今では見ることができない光景。輸送収入を失い、乗客も減少し続ける「へいちく」は、いま危機的状況に直面している。

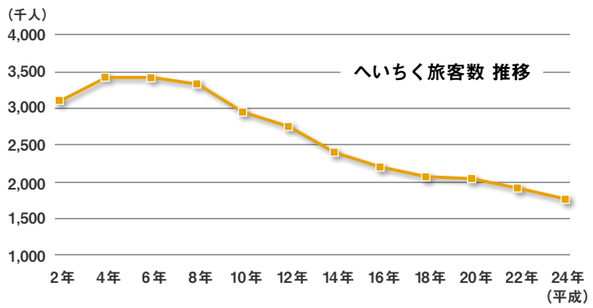
「毎月一つは何かやろう」と、職員が共通意識を持ち、地域住民と寄り添えるイベントを展開する「へいちく」。11月24日には、日本航空やトヨタ自動車九州と連携し「のりものフェスタ」を開催。車両運転をはじめとする体験コーナーなどで、郷土の子どもたちに「のりもの」の魅力を伝えました。

平成16年に誕生した「ちくまる」は元祖ゆるキャラとも呼び声が高く、地域のマスコットとして活躍。他にもホルモン鍋列車やボジョレー・ヌーボー列車などユニークなイベントを企画し、地域に根ざした活動を展開しています。

〝その時〟のシミュレーション

乗客の減少が招く収入減を運賃値上で補えば、更なる乗客減少を招きます。そこに近年の異常気象による災害が加われば、地域鉄道は致命傷を負います。

では、地域から鉄道が無くなると、どうなるのでしょうか。一般的にはバス利用へ転化しますが、そのバス路線でさえも採算が取れず、廃止が検討されているのが現状です。バスもなければ、急な積雪時はタクシーか徒歩で移動するしかありません。通勤はもちろん高校生や大学生は日々バイクや車で通うしかなく、生活の根本が揺らいでいきます。しかし、それは移動手段だけの想定に過ぎません。私たちが鉄道を失うことが何を意味するのか、いま真剣に向き合う岐路にさしかかっています。



●interview

より愛される鉄道を目指して地元に寄り添う存在へ

人件費削減をはじめ、駅窓口の委託化、休日ダイヤの導入など、これまで徹底した経費削減を行ってきた「へいちく」。しかし、立ちはだかる経営難の壁は想像以上に高く、もはや鉄道会社だけの経営合理化や経費削減だけでは乗り越えられなくなっています。

景気低迷が続く中、自家用車の普及や少子化などにより、乗客が年々減少し続けている「へいちく」は、いま厳しい状況に直面しています。この危機を乗り切るには、まず、地元のみなさまに関心を持っていただき、愛される存在にならなければなりません。そのために「毎月何かやろう」と社内一丸となってさまざまなイベントを企画し、知名度の向上を図りながら、地元に密着した取り組みにチャレンジしています。

私たちは、今までもこれからも、地域の公共交通機関として、より地元に親しまれる「へいちく」であることを目指さなければなりません。受け身ではなく積極的に、情熱をもって取り組む姿勢が見えなければ、地元のみなさまの理解は得られませんし、心を動かすことはできないと思います。ぜひみなさまには、鉄道がなくなった町の姿を想像していただき、少しでもお力添えをいただけたらと願っています。

平成筑豊鉄道株式会社
代表取締役
武内 功 専務